

幸せな林家の復活を願っておきながら、プログラミングに傾倒し、学校の授業を居眠りばかりで過ごした中学生の僕は、見事に高校受験に失敗するのでした。昭和六十三（一九八八）年から平成元（八九）年にかけて、十六歳だった僕は、母親の勧めで河合塾が新設した「大学入学検定試験合格コース」の授業料を稼ぐべく、名古屋市内の新聞販売店に住み込みで働きながら通学を始めました。

世の中はバブル全盛期。塾に通う友人たちはどこか余裕があり、毎朝四時から二百五十部の新聞を配り終えた爪は新聞のインキで真っ黒で、毎晩深夜まで集金業務を行い睡眠不

平成元年 新聞配達

お高生
はし林

足気味で授業を受ける僕とは何か違う感じを受けました。

トイレ共同、風呂なし、陽の当たらない六畳一間の生活。世の中のバブルな生活とのあまりの違いに寂しさどむなしさを感じていました。当時の労働環境も現在とは随分と違い休日はわずか。少年だった僕には耐えがたく、公衆電話から母親に「周りの友達は毎日楽しそうにしているのに、なんで僕はばかり苦労しないといけないんだ」と、泣きながら電話したこともありました。後日、母親から「毎日、頑張れ、頑張れ。」と一言だけ書かれたはがきが届きました。きつと母親もとてもつらかったのだと思います。もしかしたらこの経験は僕を自由にさせすぎた母親なりの最後の教育だったのかもしれない。せん。

(エイチーム社長)